

英語教育における非文情報の活用

大竹 芳夫

1. はじめに

コミュニケーションのための英語教育が叫ばれて久しい今日、英文法の指導も次第にその姿をかえつつある。学習者の興味・関心を喚起しながら英文法の指導を行うためには、英語学の研究成果を積極的に活用することが重要である。とりわけ、非英語母語話者で学習者にとって、英語母語話者が不自然、または容認不可能であると判断する表現を知ること、さらには非文との判断を導くメカニズムを理解することは非常に有益であると考えられる。本研究では、英語表現や基本的構文のいくつかを取り上げ、日本語との比較やさまざまな英語学的観点からそれらの諸相を検証する。

2. 英語の所有表現について

日本語話者が英語を学習する初期の段階で注意すべきことに、後置詞として働く日本語の格助詞と英語の前置詞との間に必ずしも一対一の対応関係が成立しないということがある。

- (1) 彼は東京に着いた
- (2) a. He arrived at Tokyo.
b. He reached Tokyo.

(1)の日本語の後置詞「に」は(2a)に示すように英語では前置詞 at と対応することもあれば、(2b)のように対応表現が具現化されない場合もある。また、日本語の後置詞と英語の前置詞との間に対応関係が認められる場合でも、英語母語話者がどのような認識過程を経て適切な前置詞を選択するのかを英語学習者が学ぶことは興味深いと思われる。例えば、Langacker(1990)は次のようなそれぞれの英語表現における前置詞の容認可能性の相違について分析している。

- (3) a. the bottom of the jar
b. ?the label of the jar
c. ?the lid of the jar
- (4) a. ?the bottom on the jar
b. the label on the jar
c. the lid on the jar
- (5) a. ??the bottom to the jar
b. ??the label to the jar
c. the lid to the jar

(3)-(5)の容認可能性の相違から明らかなように「ピンの{底/ラベル/蓋}」に対応する英語は of, on, to を個別的に要求する。of の基本的意味は本来的に全体と部分の関係を合図するが、(3b-c)が示すように「ビン」に対して「ラベル」や「蓋」は本来的に「全体-部分」の関係を保証しないため of で両者を関係づけることは不自然である。他方、「底」は「ビン」の一部であると捉えられるため(3a)のように of で連結できる。また、表面接触を合図する on は(4b-c)のように「ラベル」や「蓋」と「ビン」との場所的關係を表現し得るが、(4a)の「ビン」と「底」の「全体-部分」の關係を読み込むことができるような場合に用いることは適當ではない。さらに、to は分離可能なもの同士の所屬關係を表す。そのため、(5a-b)の「底」や「ラベル」といった「ビン」と別個に存在すると想定しがたい場合には to で両者を関係づけることは不自然である。しかし、(5c)の「蓋」のような「ビン」と分離して存在しうるものについては to で互いを結び付けることは可能である。Langacker (1990)が提示する非文情報は、英語母語話者がどのような認知過程を経て狀況を言語化するのかを示唆しており、日本語話者が格助詞「の」に対応する英語表現を適切に選択する際に役立つ言語学的知見である。

また、日本語の格助詞「の」に対応する英語表現の問題の一つに、of 形と' s 形の交替可能性がある。of 形と' s 形の交替可能に関する句レベルの研究としては、意味的階層性に基づく Hawkins (1981)や Lyons (1986)などがある。Hawkins (1981)は(6)のような階層を提示し、of 形や' s 形の交替可能性を説明しようと試みている。具体的には、(6)の階層は、of 形や' s 形の交替に関して人間または人間の身体部位などを表す名詞句が無生物を表す名詞句に先行して生ずることを規定しようとするものである。

(6) [HUMAN < [HUMAN ATTRIBUTE]] < [NON-HUMAN, ANIMATE] < [NON-HUMAN, INANIMATE]

たしかに、Hawkins (1981)が示す意味的階層は of 形と' s 形の交替現象をある程度説明してくれる。しかしながら、(7)に見るようにさまざまな反例が存在することも否定し得ぬ事実である。

(7) (i) [HUMAN] - [HUMAN]
Mary' s brother / the brother of Mary

反例:

Mary' s doctor / *the doctor of Mary

(ii) [HUMAN] - [HUMAN ATTRIBUTE]
Helen' s legs / ^(?)the legs of Helen

(iii) [HUMAN] - [NON-HUMAN]
Mary' s cat / [?]the cat of Mary

(iv) [HUMAN] - [NON-HUMAN, INANIMATE]
Mary' s car / [?]the car of Mary

反例:

the youngest children' s toy / the toys of the youngest children

(v) [HUMAN ATTRIBUTE] - [NON-HUMAN, INANIMATE]

the company' s car / ?the car of the company

反例:

the body' s temperature / the temperature of the body

(vi) [NON-HUMAN, ANIMATE] - [NON-HUMAN, INANIMATE]

the cat' s basket / ?the basket of the cat

(vii) [NON-HUMAN, INANIMATE] - [NON-HUMAN, INANIMATE]

the ship' s funnel / the funnel of the ship

反例:

a. ?the mountain' s peak / the peak of the mountain

b. ?the house' s roof / the roof of the house

Hawkins(1981)の意味的階層性には反例が確認されるものの、このような英語母語話者にとって不自然であると判断される表現の情報、つまり非文情報は非英語母語話者に英語を指導するうえで貴重な情報である。しかし、of形と's形の交替現象は句のレベルだけで的確に捉えられるものではない。談話の流れがof形と's形の交替を決定する場合があるからである。Quirk *et al.* (1985)は次のような例を提示し、of形と's形の交替に談話の原則が関わっていることを説明している。

(8) The speaker said that, among the global problems that face us now, the chief one is the world' s economy. [*economy* is in focus]

(9) He went on to say, however, that in order to succeed we must first tackle the economy of the industrialized nations, which is the basis for the sound economy of the world. [*world* is in focus]

(8)-(9)のof形と's形の選択には「文末焦点の原則(end-focus principle)」が関わっているとQuirk *et al.* (1985)は説明する。of形も's形も談話において使用される以上、談話の情報構造がさまざまな表現の選択に影響を与えるのは当然の帰結である。しかしながら、従来の研究ではof形と's形の談話レベルでの交替現象について十分には具体的に論じられてこなかったように思われる。実際の言語資料を観察すると、次のようなof形と's形の交替を確認できる。

(10) Some DNA viruses become inactive and escape detection by the host' s immune system by insinuating their genetic material into the DNA of the host cell. A retrovirus, however, must first use its enzyme called reverse transcriptase to convert its RNA into a DNA molecule, which can then insert itself into the

cell' s DNA and order the cellular machinery to begin producing more retroviruses. Or it can remain dormant and invisible to the immune system, awaiting some signal to begin causing trouble. Hidden in the cell' s DNA, says David Baltimore, who shared a Nobel Prize for the discovery of reverse transcriptase, the viruses "have found the perfect niche."
(*TIME*, Nov. 3, 1986:32)

Quirk *et al.* (1985)の説明に従うならば、(10)の the DNA of the host cell という表現では the host cell が焦点化を受けることになる。しかし、(10)の談話では the DNA と the host cell の所有関係は新しく提示されており、the DNA of the host cell 全体が焦点として機能していると考えられる。ただし、ひとたび the DNA と the host cell の所有関係が情報として成立すれば、後続談話においては DNA に焦点をあてた' s 形が用いられ the cell' s DNA となる。こうした談話レベルでの研究は、実際の英語を発話する際に貴重な情報となる。

句レベルではなく談話レベルで捉える必要がある交代現象をさらにもう一例考えよう。stern も tail も「船尾」という意味を表すが、インフォーマントによれば、' s 形を用いて表現できるのは stern ではなく tail である。

- (11) a. 'the ship' s stern
- b. the ship' s tail

次のような言語資料が、インフォーマントが示す(11b)の判断を裏づけてくれる。

- (12) Jones reported the movements of the ship' s tail. (*Reader' s Digest*, 1974:102)

しかし、次に示すような談話においては、(11a)で不自然であると判断された the ship' s stern が自然に用いられていることに注意する必要がある。

- (13) The helicopter hovered above the ship' s stern. For Jamin, this was one of the toughest jobs in flying: keeping a chopper stationary in strong, gusty winds. He had to make constant, rapid corrections - and the crew all knew that another thrust of the ship' s mast could mean disaster.

It was 7:45 a.m. when Manchon began his first descent. Although Collins played the steel cable out as smoothly as he could, the wind made vertical descent impossible. Blown toward the chopper' s tail, the cable twice came close to tangling in the craft' s wheels (*Reader' s Digest*, May 1979:85)

(13)では、the ship' s stern(「船尾」)と the chopper' s tail(「ヘリコプターの尾部」)とが対

照的に同一談話において生じており、話し手は船尾に言及する際に船とヘリコプターのどちらの尾部であるかを積極的に聞き手に伝達することが必要である。stern という語彙は基本的に他の乗り物ではなく「船」の尾部を唯一的に保証するため、(12a)のように所有・所属関係を積極的に表現する's形を用いてshipとsternの所属関係を表現することは冗長であり不自然となる。しかしながら、(13)のようにヘリコプターの尾部と明確に区別する必要がある場合には、'sを用いてshipとsternの所属関係を積極的に表現すると考えられる。ここでも、単語や句を越えた談話レベルの情報構造が適切な言語形式を選択する際に大きく関わっていることがわかる。

3. 意味と形

Bolinger (1977) は意味と形が一对一の対応を成し、形が違えば意味もまた異なることを例証した。従来の英語教育において、形式的な書き換え問題が頻用された結果、英語母語話者が捉える意味の相違が軽視されてきた面があるように思われる。英語の真の姿を学習者が理解するためには、それぞれの英語表現に応じた適切な発話場面や文脈を指導する必要がある。

最近の研究成果を踏まえながら、英語学的知見の英語教育への活用可能性を探ることにしよう。中右(1994)は次のような一見、同義的な例について認知意味論の視点から興味深い峻別を与えている。

- (14) a. She wrapped the baby with a soft towel.
b. She wrapped the baby in a soft towel.
c. She wrapped a soft towel around the baby.

中右(1994)は(14a-c)の言語表現が異なる認知過程に基づいて存在していることを指摘し、①赤ん坊が動いたのはどの文か、タオルが動いたのはどの文か、②タオルが全部使い切られたのはどの文か、という観点から考察している。まず、第一の問題について、(14a)ではタオルの方を動かして赤ん坊をくるみ、(14b)では赤ん坊の方を動かしてタオルにくるんだという状況をそれぞれ表現する。これは、(14a)のwithの項であるa soft towelは「道具」を表し、「道具」扱いを受ける項は必ず動くものとして認識されるが、(14b)のinの項であるa soft towelは「場所」扱いを受け、「場所」の項は決して動かないものと捉えられるからである。(14c)はthe babyが「場所」を合図するaroundの項として生じているので、動くのはa soft towelの方であるということになる。さらに、タオルが使い切られたという状況を表現するのはどの文かという問題に関してであるが、(14a)(14b)と(14c)の文法関係の結び付き方に違いがあり、それに応じて意味関係にも違いが生ずると中右(1995)は述べる。(14c)だけがa soft towelがwrapの項として表れており、タオル全面がくるむという行為に関係していることになる。そのため、(14c)はタオルが使い切られたという状況で用いられるが、(14a-b)ではa soft towelは「道具」や「場所」扱いを受けているだけで全部使い切られたかどうかは不明となる。中右(1994)の観察をもとに、筆者の担当する「学校文法」のクラスで①と②の質問をしたところ①は30名中23名、

②は 25 名が正しい予測をした。英語の形式面だけでなく、状況を言語化する過程にも学習者の目を向けることで、英語をより深いレベルで理解することが可能となろう。学習段階に応じて、このような認知言語学的知見を示すならば、ことばを単に「形」として捉えるのではなくその背後の「意味」に学習者の関心を喚起することができると考えられる。

知覚動詞を含む構文は高等学校での学習事項である。次例は、英語の補文選択が、対象となる事象が知覚領域に関わるのか、認知領域に関わるのかに応じて決定されることを示している。

- (15) a. I saw *him crossing the street*. (知覚) (Verspoor 1996)
b. I saw *that he crossed the street*. (認知) (Verspoor 1996)
c. I could see (*that*) *my friend needed my help*. (知覚・認知)

V-ing を選択した(15a)は「彼が通りを渡っているのを見た」という意味になり、Verspoor(1996)によれば、知覚作用が生じた瞬間時に直接知覚した進行中の事態を表わす。一方、that を選択した(15b)は直接知覚の含意はなく「彼が通りを渡ったのがわかった」という認知領域での理解に関わる。(15c)のように知覚と認知の間で曖昧性が潜在する場合もあるが、概ね知覚と認知という違いが英語の補文選択に働いていると考えられる。近年、認知言語学の研究成果によって、英語母語話者が状況に応じて英語構文を適切に選択するメカニズムが次第に明らかになってきている。こうした研究成果が英語教育に積極的に活用されることが期待される。

4. 日英語の発想の相違

日本語話者が英語を発話する際にしばしば観察される誤りに次のような表現がある。

- (16) 「太陽は東から昇り、西に沈む」
a. *The sun rises from the east and sets to the west.
b. The sun rises in the east and sets in the west.

日本語では太陽の昇り沈みは東(出発)から西(着点)への移動現象と捉えられるが、英語では東と西の方角という in が指定するそれぞれの場面での出来事として把握され言語化される。阿部(1998)が説明するように、(16a)は日本語と英語の発想の相違に起因する誤りであると考えられる。また、ある特定の情報を指示するのに、英語と日本語とで異なる情報の捉え方をする場合がある。例えば、(17)の「～という点で」を(18)のような英語で表現することはできない。

- (17) これは失敗する可能性が高いという点で、リスクが非常に大きな使命である。
(18) *This is a very high risk mission {at/in} the point that it is very likely to fail.

(17)の日本語における「点」を英語の point と「で」を in/at と対応させて(18)のように表現することはできない。(19)のように方向性を表す名詞句 way, sense などを用いるならば、(17)に対応する自然な英語表現が得られる。

- (19) This is a very high risk mission in the {way/direction} that it is very likely to fail.

(19)において，“This is a very high risk mission”という命題情報は“in the {way/direction} that”節が表す情報空間において断定されている。way, directionは「方向」を表すことから，“it is very likely to fail”という情報はいわば「方向」の指向先と捉えることができる。日本語の「～という点で」は、この指向先の情報そのものに焦点を当てて「点」として範疇化しているという点で英語と異なる。受験参考書などではしばしばinとともに用いられるway(s)は「点」と訳すと説明されることがある。しかし、英語学習者の動機づけを高めるためには、同じ状況であっても捉え方が日英語で異なるという発想の相違にこそ指導上の関心が払われるべきであろう。

5. 英語の原因・理由表現

次の日本語に対応する英語を考えよう。

- (20) a. 太郎は12歳以上なので、全額航空券を買わなければならない。
b. 彼は年をとっているので、はやく動くことができない。

(20a-b)は理由を表す「ので」節を含んでいることから、中学校で学習する接続詞 because や高等学校で学習する since, now that を用いて次のように表現することができる。

- (21) a. {Since/ Because/ Now that} Taro is over 12, he must buy full-price air tickets.
b. {Since/ Because/ Now that} he' s old, he can' t move quickly.

しかしながら、同じく「ので」を含むにもかかわらず、(22)のような日本語に対応する英語表現として(23)のように now that 節を用いることはできない。

- (22) a. 花子は14歳未満なので、そこには入れない。
b. 彼は若いので、好きなことは何でもできる。
(23) a. {Since/ Because/ *Now that} Hanako is under 14, she can' t see it.
b. {Since/ Because/ *Now that} he' s young, he can try anything he wants.

(23)の容認可能性の相違は、now that節がbecauseやsince節と同義でないことを示唆する。しかしながら、従来の学習英英辞典や英文法書の中にはnow that節とbecause/since節との相違について十分な説明を見出すことはできない。大竹(1999)で指摘したように、Eastwood(1994)はnow that節を「理由節 (clauses of reason)」と分類し、*Oxford Advanced Learner' s Dic-*

tionary⁶(OALD)は「特定の事柄が生じている、あるいは生じたばかりだから (because the specified thing is happening or has just happened)」という定義を与え原因・理由の意味関係のみを示している。

- (24) a. *Now (that) I' ve finished the course, I have to look for a job.* (Eastwood 1994)
b. *Now you' ve passed your test you can drive on your own.* (OALD⁶)

Leech(1989)はbecause節の書き換えをnow that節に与え、「理由と時の意味を併せもつ(mixing the meaning of time and reason)」と述べている。

- (25) Let' s have a drink, *now (that) you' re here.*
(= 'because you are now here') (Leech 1989)

しかしながら、(23)においてnow that節だけが非文であることから明らかなように、now that節は話題中の現時点の状況とそれ以前の状況との変化や推移を表現する場合にのみ用いられるという点でsince/because節とは異なる。(26)のように「花子は14歳未満である」や「彼は若い」といった命題情報は「まだ」とは共起するが「もう」とは共起しがたい。「まだ」でマークされるような以前の状況との継続を表す現時点の状況をnow that節で表現することはできない。

- (26) a. 花子は{まだ/*もう}14歳未満なので、そこには入れない。
b. 彼は{まだ/*もう}若いので、好きなことは何でもできる。

一方、(27)のように「もう」と共起し得る命題情報は、話題中の現時点の状況とそれ以前の状況との変化や推移を表現するのでnow that節と対応することができる。

- (27) a. 太郎は{もう/*まだ}12歳以上なので、全額航空券を買わなければならない。
b. 彼は{もう/*まだ}年をとっているので、速く動くことができない。

Now that節の話し手は、now that節の状況と主節の状況とが時間的継起関係に基づいた連続体を成すものと認定し、その連続性を恣意的ではなく必然的であると捉えている点でbecause/since節とは異なると考えられる。高等学校でnow that節を導入する際には、こうしたnow that節の弁別的特性を踏まえながら自然な英語を読み書きできるように指導する必要がある。

6. まとめ

本研究では、最近の英語学の研究成果を検証しながら英語学的知見の英語教育への活用可能性を探った。英語母語話者が不自然、または容認不可能であると判断する表現を知ることは、

裏を返せば、非英語母語話者が自然な英語を発話する基礎的知識となる。また、英語母語話者が状況に応じて適切な英語表現を選択するメカニズムを理解することは、われわれが英語を読み、聴き、話し、書くという能力を伸ばすために重要であると考えられる。英語学習者の興味・関心を喚起しながら、実際のコミュニケーションに役立つ英文法の指導を行うことが必要である。

*本稿は、平成12年度文部省科学研究費奨励研究(A)課題番号11710260「日英語の名詞化補文に関する記述的・理論的研究」(代表者:大竹芳夫)の研究成果の一部である。

参考文献

- 阿部一. 1998. 『ダイナミック英文法』 研究社出版.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. Longman.
- Eastwood, J. 1994. *Oxford Guide to English Grammar*. Oxford University Press.
- Hawkins, R. 1981. "Towards an account of the possessive constructions: NP's N and the N of NP." *Journal of Linguistics* 17. 247-269.
- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論』 大修館書店.
- 河上誓作編著. 1996. 『認知言語学の基礎』 研究社出版.
- Langacker, R. W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter.
- Leech, G. 1989. *An A-Z of English Grammar and Usage*. Edward Arnold.
- Lyons, C. 1986. "The syntax of genitive constructions." *Journal of Linguistics* 22. 123-143.
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』 大修館書店.
- 大竹芳夫. 1999. 「Now that 節の意味と接続機能」『英語語法文法研究』第6号, 英語語法文法学会. 83-97.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Verspoor, M. 1996. "The story of *-ing*," in Martin, P and R. Dirven eds., *The Construal of Space in Language and Thought*. 417-454. Mouton de Gruyter.